

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

— 『いのちの教育』指導書 —

ドロシー・J. ターナー
リン・V. エドガー
田代俊孝 訳

はじめに

本稿は、フロリダ州ゲインズビルのリトル・ウッド小学校のリンとドロシーという二人の教員によって作られたデス・エデュケーションの指導要領である。死は長くタブー視され、教育の場でもタブーだった。しかし、現実には、死は一人ひとりの人生において大きな出来事であり、その死をどう受け容れ、悲しみをいかに超えていくかは、大きな課題である。かつては、家庭の中、社会の中、あるいは宗教とのかかわりの中で、受容できるシステムがあった。しかし、今日では、家庭にも、社会にもその機能が失われ、うまく、それを超えていけない子供や大人ができてきた。高齢化社会、ガンやエイズの患者の増加が一層それを大きな課題にした。

そのような状況の中で、すでにリトル・ウッド小学校では、フロリダ大学教育学部ハネラー・ワス教授の指導のもとにデス・エデュケーションを小学校5年のカリキュラムに入れている。今では、全米のかなりの学校でなされている。そして、その指導要領の開発も進められている。

日本でも同様の問題が起きてきている。このたび、リンとドロシーの二人の教員から提供を受け、邦訳することとした。なお、第1、2章は、1996年発行の『同朋大学論叢』第74・75合併号に掲載されている。（訳者記）

第3章 講座の計画

この章で述べることは生徒に対する情報提示の方法についてである。といっても彼らに波紋を投げかけるのではなく、生徒たちが情緒的バランスを崩したりせずに順序よく事実を体験していくためのものである。

全ての教材を使用する必要はない（1時間半の授業に対しては1時間分の教材で余りあることを保証しよう）。一つの教材を省くときには、その前にコースについてのあらゆる教育活動を把握しておきたい。講座から何かを削除する場合には、「準備・（事後の）確認テスト」の出題分野でないことを確認しなければならない。

また、教育活動を実りあるものにしてくれる授業テーマは各々の指導案において太字で示した。特に一覧表化されたワークシートの全てを第4章に示した。写真や書籍、パンフレットそして他の示唆に富むものの全てに註を付け、章末に示した。

話者の人選

終末期を迎えた病態にある話者を呼ぶため、その土地のホスピスと連絡をとるように。それがうまく行かないようなら看護スタッフに問い合わせてみる。あるいはがん協会や患者友の会などに聞くのもよい。招く前に話し手となる人物と面会し、その人物に関する知識を得ておくように。話者が子供たちとウマが合うかどうか。このことは彼らの学習能力を左右する重大事でもあるし、彼ら自身の幸福のカギを握ることにもなる。ほとんどの人間はできればそうありたいと思っているのだが、話し手に求められる方法——子供を目覚めさせ同時に安心させる穏やかでしかも事実を則したやり方——で誰もが情報を示してあげることができるわけではない。

もしも講座への参加を予定している生徒ないし教師で最近死に直面した経験のある者、あるいは死の差し迫った人間を持つ者がいたならば、話し手にはできるだけその者から目をそらさないようにしてもらおうこと。たとえ教室から飛び出してしまう者があったとしても話し手が侮辱されたわけではないのである。またこうした事態であれば話し手は悲しすぎる情報を省いてでも最低限安心感だけは生むようなやり方で話していった方がよい。

外国人の生徒が在籍する、あるいは在籍し続けているようなら（特に教室の大多数の子供にとってよく知らない文化圏に属している人間なら）その保護者は「外国人の」話者として素晴らしい人選となる。当初そのアクセントが理解しづらいものであったとしても「お母さん／お父さん」ということばから事実を引きこまれてすぐにそんなやっかさを吹き飛ばしてしまうだろう。（そして以前は「よそ者」という感情を抱いていた人間が、今や特別に素晴らしい人間なんだと感じる副次的効果もある）見過ごされ、誤解されていたあらゆるポイントは、話し合いが終わるころには教師の手によって認識も新たに印象づけられる。

ふつう授業の初日には数多くの体験の「共有」など望めない。そうなるまでには時間がかかることを強調するように。

自己の体験を物語りたいと思う生徒は常に一人か二人はいるものである。これは自分をひけらかすことではないのだと理解せよ。多くの学生にとってこれは自己の経験を自己の流儀で言葉にする初めての時間なのである。大人でさえ死という出来事を真実として受け止め、それを自分の中で消化する前段階として再び口にするようになるには多くの、掛け値なしに多くの時間が必要なのである。自分の話をしたくてたまらない学生には——もしも「共有」が定められた時間内に許されなかったとするならば——授業後に残ってもらうように頼むべきである。チーム内の一人だけでもその時、彼の言葉を聞いてあげる方がよい。このことは学生にとって単に自己の体験を、「悲しんでいない」人間に語るというだけでなく、認識が深まった後ですぐに考え方を修正できるということにつながる。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

授業で話し終えた学生の多くは、講座期間終了後、その後、あるいは次の授業の前には大人の見方ができるようになってくる。そして話してきたことを再点検し、自身の話をした中で得た見識を共有するようになる。

プログラムの見通し

死と終末の学習は数多くの分野からなるカリキュラムを含むものになるだろう。幅広い教育活動は子供一人一人のニーズにかなうようになっている。講座は約3週間で5つの段階に設定される。その中でも最大のイベントは葬儀屋での野外授業であり、共同墓地の訪問である。

数多くのモデルによって提示された講座に関する理論が組み込まれている。ブルームの『分類法』⁽¹⁾ は高次元の思考へと発展させるために使えるだろうし、パーンの『創造的問題解決の技術』⁽²⁾ は生徒たちのブレインストーミングや頭の体操、そしてロールプレイングを可能にするだろう。レンツリの『タイプⅠおよびタイプⅡの理論』⁽³⁾ に基づく活動も使えるだろう。ローレンス・コルバーグの『モラルの矛盾についての議論』⁽⁴⁾ もまた学生の倫理的判断の成長に貢献するであろう。

〔講座の前に〕

親への紹介

I. 目的

教室で死と終末に関する授業を行うことの意義について親に紹介する。

II. 教材

親への連絡用紙⁽⁵⁾ 講座の目的⁽⁶⁾ 講座の予定表⁽⁷⁾ 受講承諾書⁽⁸⁾ 家族史のシート⁽⁹⁾。

III. 演出：

A. 郵便切手を親に。

B. 親が保護者会で補助となる教師に会えるようにする。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

- C. 学生に提示している教材の全てを保護者会で示す。
- D. パンフレットを望んでいる親に対しては彼らが使いやすいようなものを提示していく。

Ⅳ. 完成

- A. 講座として行われる授業のどんなものでも、そしてすべてにおいて親たちが招かれるように説明する。
- B. 疑問や問題が生じたらどんなものであっても教師を思い出して連絡してもらおう。

生徒への紹介

Ⅰ. 目的

死と終末に関するテーマについて生徒たちに紹介する。

Ⅱ. 教材

準備テスト⁽¹⁰⁾、「死と終末の講座期間に私が学びたいと思っていること」⁽¹¹⁾、画用紙、鉛筆、クレヨン。

Ⅲ. 演出

- A. 「死と終末」⁽¹²⁾と教師が言ったとき心に浮かんだ場面を子供に描いてもらう。
- B. 「死後」⁽¹³⁾と教師が言ったとき心に浮かんだ場面を子供に描いてもらう。
- C. 子供一人一人にワークシート「死と終末の講座期間中に学びたいと思うこと」⁽¹⁴⁾と準備テストを仕上げさせる。

Ⅳ. 完成

- A. 講座のために存在する補助の教師について子供と話す機会を設ける。
- B. 子供に講座のスケジュールを説明する。
- C. 彼らが心地よさを感じないのであれば、たとえそれがどんなときでも許されるし、教師と補助の教師はその子供と話し合うために有用であると説明すること。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

- D. 講座について話したいのであれば教師に電話してもよいと彼らに伝えること。

指導案（第1時限）—— ライフサイクルにおける死

I. 目的

ライフサイクルにおける死の役割についての意識を深めていくこと。
おのおのの子供の死に対する認識をバランスよく深めていくこと。

II. 教材

生と死に関するスライド用のフィルム、映写機、書物、語彙シート、ちり紙、大きく不透明な「疑問の箱」と記された箱。

III. キーワード

お悔やみ	最後の
泣く	葬式
死去した	死の
死ぬ	悲しい
終末	悲しみ

IV. 動機づけ

A. (想像劇) ロールプレイ

1. 19__年——10歳あるいは11歳——地球にて——もはやどんな死も存在しない。
2. 我々が公園に遊びにいこうとしている場面の絵。
3. 教師はドアを開けようとする。
 - a. 道に恐竜の足跡が「目に入る」。
 - b. ポンスに恐竜の動きをするように頼む。
 - c. ポンスに自身を助けるために、アリタを引き入れるように「ほめかす」。
 - d. 恐竜を動かしているポンスとアリタのもとに直行するようにエイブ・リンカーンに頼む。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

- e. 3人の子供に来てもらい、ドアを開けるのを手伝ってもらおう。
- f. ドアが「一向に」開かないようなら学生たちは自分の座席に戻ってもらう。

B. 真実性——死の存在しない世界はどのようなものだろうか。

- 1. 恐竜に踏みつけられた後も「生きて」いなければならないとすれば、それはどのようなことになるだろうか。
- 2. とどまることを知らない成長があるとすれば、それはどんなことだろうか。
- 3. 巨大な昆虫も死ぬことがないとすれば、それはどんなことになるだろうか。

V. 演出

A. 死とはライフサイクルの一部分を担っている。

- 1. 生命あるものはみなこのサイクルを経験してく。つまり誕生、生活、死である。
- 2. 死の経験について生徒たちと議論する。
- 3. 我々の家族が死んだときに抱いた感情を確認する。
 - a. 他人とともに（あるいは）眼前で泣いたときの感情について話し合う。
 - b. 他者の深い悲しみををどうしたら感じ取ることができるのか、そしてその人間に対してどう接すればいいのかについて議論する。
 - c. 悲しい出来事が生じてしまった級友をあざ笑ったり、困らせたりにする態度に対して何ら寛容である必要はない。

B. スライド用フィルムの提示——生と死

- 1. そのフィルムについて意見を交換する。
- 2. 黒板に語彙を書き、語彙シートを配付する。

C. 世紀の変わり目から今日に至るまで死を引き起こしてきたものについて議論する。

- 1. 肺炎、「結核」など。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

2. がん, 飢餓, 公害, 自殺など。

D. 死は究極的なものである。

1. 実際に木は死んでも新しい生命を再生する。

2. たとえ死ぬことがあっても生命は他者のもとへ続いていく。

a. われわれの現在のそして未来の生活の中で, 亡くなった人間の記憶はどのように保たれるだろうか。

E. 死は情緒的反応を引き起こす。

1. 影響を受けた人間は誰でもある種の反応をする。

a. 次の授業で我々は深い悲しみに包まれている人間に生ずる反応について議論することになる。

2. 年老いた人間の死に対処することは比較的たやすい。

3. 予期せぬ（あるいは）衝撃的な死に関わるほうがずっと困難さを生ずる。

4. 我々の全てが何らかの形で深い悲しみにくれるのである。

VI. 実りあるものにするための諸活動

A. 文学：参照したものの中から味読すべく小説を一つ選ぶ。⁽⁴⁵⁾

B. この書物で印象に残った部分を書きとめる。

VII. 完成

A. 我々の全てが死を経験するし, 死に出くわす。

1. 「小さな」死という概念, 言い換えれば我々の全てが身をもって関わってきている喪失体験。

a. 子供（あるいは）幼児の時代「特有」の喪失体験。

b. 母親が仕事に行くときに感ずる喪失感。

c. 引っ越すときに感ずる友達への喪失感。

d. おもちゃ（あるいは）ペットを失ったときの気持ち。

e. 親が離婚したときに生ずる「家族」という概念での喪失感。

2. より多くの知識が健康で偏ることのない考えを形作っていく。

3. 悲嘆は癒しと回復へと道を開くものである。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

B. 時間が許すなら個人的経験の共有のために質疑応答の機会を設ける。

C. 「質問の箱」を示す。

1. もしも学生が時間内で補完できない疑問を抱いているようなら、後日回答をもらうためそのことをメモしておいてもよい。
2. 学生の中に度を越えて悲しみに暮れているものがあったり、困惑等の諸相を呈しているものがあったりして特定の質問ができないようなら、それをメモして後日答えてもらうようにすることもできる。
3. 講座期間中、クラスに有用な死と終末に関する書物を指摘しておく。

指導案（第2時限）——悲嘆の情緒的段階

I. 目的

死が生じたときに人々が出くわす情緒的反応について話し合うこと。

死の受容に関して、ある種の儀式や音楽そして芸術が重要な意味を持つのは何故かについて意見を交換すること。

II. 教材

援助体制について記されたワークシート（「ひなぎく」⁽⁴⁾）ちり紙。

III. キーワード

受容	悲嘆する
怒り	罪悪感
取り引き	思い出に残る
死別	記念公園
臨終	思い出となる儀式
否認	哀悼する
抑うつ	泣き叫ぶ
深い悲しみ	よみがえる

IV. 動機づけ

A. 休日を楽しく過ごしている状況を設定する。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

B. 隣に住む人間とお気に入りのペットが出かけている。

C. 突発的にペットは死んでしまった。

V. 順序

A. 誘発された感情——すぐにどんなことを感じるだろうか。（黒板に挙げる）

1. 否認—「いや、そんなはずはない。」「間違いだ、ケガしただけだ！」

B. 出来事を把握した後には生ずると思われる他の感情としてどんなものが挙げられるだろうか。

2. 怒り—「僕のペットを死なせやがって、〇〇（隣人の名）ふざけんな！」

a. 罪悪感—「僕がもっと飼い方をしていたら、こんなことにはならなかったのに」

b. 嬉しさ—「僕じゃなくてよかった！」（この気持ちは罪悪感を再び想起させる）

3. 不安—「今度は僕の番かもしれない。」

a. 取り引き—「神よ（あるいは）アラーの神よ（また）ヤハヴェの神よ。もしもペットを生かしてくれるのなら、僕は（ ）してもかまいません。」

4. 抑うつ（あるいは）悲嘆—「〇〇のいない人生なんて価値がないのも同然だ。」動物（あるいは人間）を失ったとき、あなたは胸に悲しみを抱き、意気消沈する。

5. 受容—「こんな形を望んでいるわけじゃない。でも実際に〇〇の人生には幕が下ろされたんだ。」「決して〇〇のことを忘れないよ。心のどこかにずっとしまっておくよ。」

C. こうした感情がわき起こったときあなたは誰と言葉を交わすか。（黒板に挙げる）

1. 親、教師、あるいは生徒指導のカウンセラー、関係者、牧師、司祭あるいはラビ（ユダヤ教の立法博士）、友人、隣人、メンタルへ

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

ルスのカウンセラーなど。

2. 「援助体制」について述べられた「ひなぎく」というワークシートに書き込む。

D. 人々はどうふるまうか。

1. 泣き叫ぶ，声を上げて泣く。
2. 言葉すくなになる，退行する。

E. どのような情緒的反応が「適当」なのだろうか。

1. 適当でないものとは。
2. 男性によって情緒的反応が示されたときに，それは重大な意味を持つのだろうか。
 - a. 女性はどうか。
 - b. 子供はどうか。
 - c. その理由または違うと思う理由は。

VI. 実りあるものにするための諸活動

A. ワークシート「以下に挙げる文を完成させよ」¹⁷⁾

VII. 完成

A. 誰かが亡くなってそれが我々に何らかの影響を与えるとき，それによって我々は傷つき情緒的反応が生ずる。しかしながら全ての情緒的反応は受容される！

1. 深い悲しみの必要性——癒しの行程の一部である。
2. 深まっている限り，悲嘆は精神的修復の一部となる。

指導案（第3時限）——死の究極性

I. 目的

子供たちは死が究極的なものであることを理解するだろう。

見知らぬことであり，それについて話すことがなく，不安や憂鬱そして迷信の源になる「死」のような話題について示すこと。

Ⅱ. 教材

医療に従事する話し手，新聞記事，書物，音楽，絵画，ちり紙。

Ⅲ. キーワード

検死	ミイラにする
死体	（死者に対する）賞賛
死骸	墓掘り人
儀式に参列する人	最後の儀式
（埋葬用の）地下室	陰気な
腐敗する	迷信
葬送歌	終末

Ⅳ. 動機づけ

死についての体験について述べられている地方新聞記者の，あるいは有名な物書きの記事を読む。具体的にはチャレンジャー（スペースシャトル）の宇宙飛行士のことや子供を巻き込んだその地方の事故の記事など。

Ⅴ. 手順

- A. 話し手：医療に従事する人間（終末期の患者と関わっている人間が望ましい）
 1. 「終末期」と定義づけられた状態について話し合う。
 2. 人が亡くなったとき死体に生ずる身体的変化について説明する。
 3. 質疑応答の時間。
 4. 話し手によって提起された要点を整理する。
- B. 死をテーマとする書物についての意見交換。
 1. 死をテーマとする書物¹⁸⁾を示し，それについて議論する。
 2. 教室で読まれる書物を引用する。具体的には『一匹のブタも死なない日』¹⁹⁾。
 3. 教室で借りたり放課後手にとってみることのできるような他の書物の存在を生徒たちに印象づける。
- C. 死についての迷信

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

1. 子供たちの知らないような数種の迷信について記録しておく。
2. 耳にしたことのある迷信について尋ねる。
3. 科学的事実と「信仰」（あるいは）迷信についての相違点を示す。
家族の習慣や文化的な伝統を決して貶めることのないように気を配る。

D. 儀式

1. ニューオーリンズの黒人における葬送式の手順。
2. 死骸を洗浄するギリシアの島々の習慣。
3. カトリック教徒における鎮魂のためのミサ。
4. ユダヤ民族の習慣。
5. ヒンズー教徒の習慣。
6. 子供たちが知りうる他の儀式について尋ねる。

VI. 実りあるものにするための諸活動

- A. 他民族や歴史の上から自らの文化に根ざした儀式について調査する。
- B. 世界中の葬送儀礼に用いられる音楽をテープに録音しておく。⁽²⁰⁾
- C. 死を描写した絵画や適当な芸術作品を示しておく。⁽²¹⁾

VII. 完成

- A. ワークシート「どうして家族にさよならがあるのだろうか」。⁽²²⁾
 1. 用紙を家に持ちかえって祖父母や親たちと一緒に書き込んでいく。
 2. 次の授業で何が話し合われたのかを説明する。
 3. 全学生は再び用紙を持ってくる。その際、彼らが望まない限りそれを読む必要はない。

指導案（第4時限）——死とともに生きる

I. 目的

死は人生の一部であり、誰もが常に死に陥る可能性を持っていることを示すこと。

遺された人間が自己の人生を歩み続けることの意義を示すこと。

Ⅱ. 教材

黒イチゴの味というスライド用のフィルム、映写機、ちり紙。

Ⅲ. キーワード

埋葬する	墓場
ひつぎ	霊柩車
ひつぎ持ち	葬儀屋
共同墓地	死体置場
式典	自殺
棺	葬儀人
葬儀用の馬車	検視
葬儀屋	（聖職者の）お見舞い

Ⅳ. 動機づけ

これまでに示された概念を再確認する。

- A. 「どうして家族にさよならがあるのだろうか」について復習し、議論する。
- B. 年老いた人間の死は比較的たやすく受容される。
- C. 予期せぬ死、あるいは若者の死は老年期にある者の死に比べ、対処がずっとやっかいである。

Ⅴ. 手順

- A. スライド用のフィルムを見せる——「黒イチゴの味」
 1. たとえ子供や大人が（教室にいる誰かかも知れないがそれも同様に）ハチの針に対するアレルギー体質であったとしても、それが原因で亡くなることはほとんどない。
 2. その子供が二度と帰って来なかったこと—死の究極性—について話し合う。
 - a. そのフィルムはマンガ仕立かもしれないが、そこで体験された死はまぎれない現実の一典型例である。
 - b. 死は永遠（の問題）なのだ。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

c. 生き続けることには痛みが伴う。しかしながら人生は続くのである。

B. 病気が常に「判断しやすい」ものであるとは限らない。

1. がん，心臓疾患，糖尿病など。
2. 例えば結核，エイズなどのうち，どの病気が伝染性のものなのか。
3. 病人はどんな行動をとるのか。そしてどのように映るか。

C. 突発的イベントが生ずる

1. 我々ではどうしようもない原因によって生ずるイベントにはどんなものがあるだろうか。——木の葉が活力を失い落ちること。岩の落下が雪崩を生み出すことなど。
2. 我々の力で多少なりとも調整可能なこととは何だろうか。——ベッドから落下すること（ベッドで寝返りを打てるから）腰掛けたときに椅子から転げ落ちること（床に水平にしておく代わりに座ったときに椅子を後方に傾けることができるから）など。
3. 自分自身を見失ってしまうことが原因で生じることは何だろうか。——母親に対して憤慨したのでドアをバタンと閉めたら，弟の指をはさんでしまったこと。上司に腹を立てて周囲への注意を怠った親が，結果として交通事故に巻き込まれてしまったことなど。

D. 自殺

1. 種類を定義する。
 - a. 突発的なもの—若者はとかく親や友人を「驚かそう」とするものだが，本当に死ぬことを考えてはいけない。
 - b. 意識的なもの—睡眠薬や銃などを用いる。解決できない情緒的問題や身体の痛みがひきがねとなる。
2. 危機状況をくぐり抜ける手段として自殺にひかれるようになる。——そのときの感情とは一体どんなものなのだろうか。
 - a. 親が離婚したり亡くなってしまったりしたとき，子供は見捨てられたと感じるものである。（こんな状況で留守番をしていると

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

きに可能性があることをメモする)

b. 「あんたなんか嫌いよ。死んじゃえばいいのに」と罵ってケンカした後親が本当に亡くなったときには、子供は責任（あるいは）罪の意識を猛烈に感じるようになる（このような場合には専門のカウンセラーないし聖職者による処置が必要とされる）

3. 多くの人間が自殺を考えるようになる時期、それはつまり10代である：

a. 10代において人々に自殺を意識させる要因は何なのだろうか。すなわちそれは仲間からのプレッシャー（薬物による死や他の「突発的な」死を誘発する）であり、「思い」をよせても相手が思っていないことであり、綺麗な服や車を持っていないことなどである。

4. 以上述べてきたことは、彼らのような難しい年代が抱える自殺についての確かな理由なんだろうか。

a. 対処の方法として、他のよりよいものは何だろうか。

VI. 実りあるものにするための諸活動

A. ロールプレイング——5つの状況を想定したもの⁽²³⁾

1. ペットが終末期にある。
2. 教師が終末期にある。
3. 非常に身近な祖父母。
4. 近寄りがたい祖父母。
5. 友人。

B. グループの全てに「演技」の準備をさせる。——時間の許すかぎり出来るだけ長く演ずる。

VII. 完成

A. 「仮定した」場面を設定する。

1. 誰も死についてあなたに話してくれたことはなかった。
2. 共同墓地を通るといつも、お母さんはあなたの頭の向きを（共同

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

墓地が目に入らないように)動かした。

3. 死について大人が話しているときは、部屋から出ていくように言われていた。
4. あなたはそれについてどう感じていたのだろうか。

指導案（第5時限）——現行における保護（選択）

I. 目的

誰かが亡くなったときに適用されることになる法律上の事柄を示すこと。
家族の誰かが亡くなったとき、彼らはどのように保護されるのかを示すこと。

II. 教材

法律および（あるいは）保険の専門家、ワークシート「遺言状」⁽²⁴⁾、「自分で死亡記事を書く」⁽²⁵⁾、「墓碑」⁽²⁶⁾、健康保険証、生命保険の証券⁽²⁷⁾

III. キーワード

死亡証明書	記念碑
墓碑	記念に作られたベンチ
遺言の管理者	死亡
女子指定遺言執行者	孤児
墓石	遺言者
法定相続人	未亡人
保険	男やもめ
墓の台石	遺言
墓石	

IV. 動機づけ

今日の授業で我々は人の死の（前あるいは）後になさなければならない特定の事柄を体験することになる。

V. 手順

- A. 分別のある人々がまだ元気なうちに行っている取決め

子供たちのためのデス・エデュケーション (II)

1. 生命保険とその効力。
 2. 遺言。
 - a. 学生たちは自分の遺言を完成させる。
 3. 自分の葬儀に関する「事前の取り決め」
 - a. 葬儀にかかる一切のものを購入し前もって代金を払う（ひつぎをも含む）。
 - b. 自分用の埋葬地（あるいは他の家族用のもの）を購入する。
 - c. 牧師，司祭，荼毘，葬儀屋などの手配をしておく。
- B. 以上述べてきたものがどうやって機能していくか。
1. 家族は死亡証明書のコピーを提出する。
 - a. 保険会社へ。（自動車，埋葬，健康，生命，抵当権などの諸保険に対して）
 - b. 軍の共済組合へ。
 - c. 社会保障センターへ。
 2. 給付金の還付を受ける。
- C. 弁護士による遺言の「読み上げ」（ふつうは葬儀の後に行う）
1. 形式ばった話し合いではなく，ふつうは近親の人間に連絡を取るものである。
 2. 遺産相続者の告示。
 3. 未成年者に対して立てなければならぬようなら後見人を選定する。
 4. たとえ必要がなさそうでも未成年者に対して後見人を選定する。
- D. 葬儀屋は遺体を葬式用に身づくろいするだけでなく，死後実際に生ずる様々な手続きにも一役買う。
1. 家族のため死亡証明書のコピーを手に入れる。
 2. 新聞社に死亡の事実を流す。
 - a. 学生は死亡記事を完成させる（でもあまり真剣に受け止めずにこのような形であればよいと思うものにする）。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

3. 「生前の取決め」が行われていなかったようなら葬式のプランについてアドバイスする。
 4. まだ購入していないのであれば家族が埋葬地を選定し購入する上での案内役となる。
- E. 墓石への文字の刻み方。
1. 「墓碑」。
 - a. デザインを決め碑文を完成させる。
 2. 墓の台石。
 3. 霊廟。
 4. オベリスク（方尖塔）。
 5. 石棺。
 6. 墓石。
 7. 地下納骨所。

VI. 実りあるものにするための諸活動

- A. 弁護士（代理人）と連絡を取り、遺言の存在が必要とされるのはいつかを書きとめておく。
- B. 保険代行業の人間と連絡を取り、人が亡くなったときに適用される保険（あるいは）給付金について理解しておく。

VII. 完成

- A. 万一あるいは実際に死ななければならないようなとき、大人として家族のためにしてあげられる様々な手段を再確認する。
- B. ある人の人生を決して忘れることのないように我々や他の人間が記念碑的なものを作ろうとする。そのときの実際上の方法について再確認する。

指導案（第6時限）—— 儀式と習慣

I. 目的

誰かが亡くなった後に我々の文化圏で行われる習慣を示すこと。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

我々の習慣と他の文化圏との異同について比較検討すること。

Ⅱ. 教材

葬儀場と共同墓地についてのスライド用フィルム、映写機、異文化に属する話し手、ちり紙

Ⅲ. キーワード

棺	霊柩車
火葬	ひつぎ持ち
火葬場	焼却炉
(死者に対する) 賞賛	石棺
土葬	墓
霊廟	墓石
記念碑	骨つぼ
オベリスク (方尖塔)	地下納骨場

Ⅳ. 動機づけ

今日、われわれは人が死んだ後で実際に家族がしなければならないことについて知ることになる。

Ⅴ. 手順

A. 葬儀場に関するスライド用フィルムを示す。

1. それについて議論する。
2. 野外実習から分かることについて説明する。

B. 他の（異質な）文化圏に属する話し手について紹介する。

1. 死についての（自らが属する場所での）文化的伝統について話者に述べてもらう。
2. 質疑応答の時間。
3. 徐々にその地における文化的慣習について整理する。（とりわけ大事なものは話者に強調したい点が存在する場合である）

C. 他の文化圏の習慣を確認する。

- a. ギリシアの島々。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

- b. アイルランド人
- c. 黒人
- d. アメリカの先住民族（アメリカインディアン）。
- e. ユダヤ民族。

D. スライド用フィルム——共同墓地。

- 1. 共同墓地について意見を交換する。
 - a. 歴史的にみたその価値。
 - b. 系譜。
 - c. 芸術性そして美的価値。

VI. 実りあるものにするための諸活動

A. 様々な人間の生涯について実地調査を行う。

- 1. 生前の状況。
- 2. 死後の状況。

B. インタビュー（面接調査）のやり方を教える。

- 1. 特別な事例に関する事前調査。
- 2. 聞きたいことを予めメモしておく。
 - a. 答えを書き込むための用紙の余白の確保。
 - b. インタビューをテープに録音する。

VII. 完成

A. 野外実習に際して望まれるふるまい。

- 1. 葬儀場での無駄口をたたかず畏敬に満ちた行動。——死後に関する「取り決め」を行うため葬儀場に来ている家族があるかもしれない。
- 2. 質問の時間が与えられるだろう——話している人間を邪魔してはいけない。
- 3. 気分が悪くなったらどんな場合であっても教師または親に伝えてバスに戻るようにする。
- 4. 葬儀場でも共同墓地でも仲間の反応を尊重する。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

5. 友人が倒れたとしても連鎖反応的に自分が倒れてはいけない（特に女子は注意を要する）。
 6. 墓碑について紹介する（事前に話し合う機会を持たなかったとしても紹介せよ）。
 7. クレヨンで拓本を取る。——パートナーを伴って行う「拓本」の取り方。
 8. 新品でない衣服を身につける。
 9. 野草を摘んでお墓に供えてもよい。
 10. 親戚に墓地に埋葬された者のいる子供は、そこへ供えるため花を持ってきてもかまわない。
 11. 「真新しい」お墓や現在掘られている墓に近づかないようにする。
- B. 屋外での食事
1. 子供たちにお墓の「上」で食事を取ろうとしないことを約束させる。
 2. その場所の美しさと静けさを大切にする。
 3. 相応しいふるまいとは何であるかを列挙していく。
 4. 楽しい雰囲気であるのに相応しい場所も教える。——でも失礼のないようにする。

指導案（第7時限）—— 葬儀場と共同墓地（野外実習）

I. 目的

葬儀場と共同墓地を子供たちに実体験してもらうこと。
死にまつわる恐怖感を取除する手だてを与えること。

II. 教材

共同墓地に関するワークシート⁰⁸、クレヨン、印刷用紙、鉛筆、手ぬぐい、ペーパータオル、昼食、飲み物、敷きもの、屑入れ、親、チャプレン。

III. 動機づけ

葬儀場と共同墓地への訪問を大過なく体験させること。

IV. 手順

A. タイムスケジュールを決める。

1. 葬儀場での実習は45分～1時間とする。
2. 共同墓地での活動は1時間半～2時間とする。
3. 昼食の場所は墓地のスタッフによって割り当てられた所とし、30分～45分とする。

B. 葬儀場

1. まず手始めに教会で子供たちと管理人ないし指名を受けた人間が顔を合わせることにする。
2. 葬儀場としてふさわしいところを訪れる。必要であれば便宜上2グループに分ける。
 - a. 検視のための部屋（ただし遺体があってはならない）。
 - b. 棺桶を選ぶ部屋。
 - c. 霊柩車。

C. 共同墓地

1. 事前に該当する集団にワークシートを配布しておく。
2. 指名された集団が親（あるいは）教師と一緒に考え、共同墓地に関するワークシートについて書き込みを終えておくように指導する。
3. 指定された時間内に行動を終えたらワークシートを提出し、拓本の教材を受け取る。
 - a. 2人1組で行う。1人は拓本用紙（12cm×18cm）を興味のある文章やデザインの表面に載せ押さえておく。
 - b. もう一人はむきだしのクレヨンの端を持って、その上からこすっていく。
4. 用紙の裏に自分の名前を書いてその「拓本」を提出する。
 - a. 時間が許せば2枚目に挑戦してもよい。

V. 実りあるものにするための諸活動

- A. 墓石に刻まれた著名なその土地（あるいは自分がそれに属していて

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

もよいが) の一族について追跡してみる。

1. 「共同墓地での課題カード」⁽²⁹⁾。

B. 親を伴いその葬儀場へ個人的に訪れる。

1. 訪問者を受け付ける部屋。

2. 遺体を検死する。

3. 2度目の訪問をレポートにまとめる。

VI. 完成

A. 野外での食事：その日の活動に関する疑問や活動全体としての議論が喚起されるようなリラックスした雰囲気。

B. 都合がつくなら共同墓地を去るときに車で端から端まで墓地全体を通っていく。その際、目立つお墓や地区には特別にコメント（場所の位置や何であるかなど）を付けておく。（実習の最後に行う最良の方法であり、こうすれば子供たちはキョロキョロとあたりを見回すことがない。そのことは家族を伴って再び来たいと思わせることにもなるのである）

指導案（第8時限）——まとめ

I. 目的

それ以前の授業で紹介されてきた概念を再確認すること。

生徒たちが最後まで抱えている問題に答えていくこと。

死の認識について学生たちが得た知識や態度となって現れた変化を分析すること。

II. 教材

確認テスト、評価用紙、紙、クレヨン、鉛筆（遺言、死亡記事、墓碑）⁽³⁰⁾

III. 動機づけ

野外実習で最も印象に残った記憶や体験はなんだろうか。

IV. 手順

A. 頭に浮かんだ疑問や、個人的な経験に対してコメントされることの

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

なかった疑問について答えていく。

- B. 野外実習で目についたものは何か再確認する。
- C. 準備テストと学生の評価を完成させる。
- D. まだなされていないようなら遺言や死亡記事、碑文を作る。
- E. 実習後に感じた絵を描いてみる。⁸¹⁾

- 1. 「死と終末」
- 2. 「死んだ後」

- F. 話し手として来てくれた全ての人、葬儀場のスタッフ、共同墓地の管理人に感謝の手紙を書く。⁸²⁾

V. 完成

- A. 親の評価用紙を配る。
 - 1. 評価用紙⁸³⁾は指定された期日までに戻してくれるように前もって言ってから渡す。
- B. 「拓本」を返す。（年度末に行われる芸術祭に出展するため保管していたのではない）

メモ：

- (1) ブルーム『分類法』1956年
- (2) パーン『創造的問題解決の技術』1977年
- (3) レンツリ『タイプⅠおよびタイプⅡの理論』1977年
- (4) ローレンス・コルバーク『モラルの矛盾についての議論』1966年
- (5) ワークシート。第4章掲載
- (6) ワークシート。第4章掲載
- (7) ワークシート。第4章掲載
- (8) ワークシート。第4章掲載
- (9) ワークシート。第4章掲載
- (10) ワークシート。第4章掲載
- (11) ワークシート。第4章掲載

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

- (12) キュープラー・ロス『子供と死について～子供たちの死に関する視覚的な解釈の叙述のために～』を参照せよ。
- (13) 上に同じ。
- (14) ワークシート。第4章掲載
- (15) 「参考文献」巻末参照
- (16) ワークシート。第4章掲載
- (17) ワークシート。第4章掲載
- (18) 「Gramp」のようなビデオフィルムも有用である。またその妻の死を追ったものもいだろう。そして彼の家族のその後4年間は「チリスマスの農場」に示されている。
- (19) 「参考文献」巻末参照
- (20) 「音楽」リスト巻末参照
- (21) 「芸術」リスト巻末参照
- (22) ワークシート。第4章掲載
- (23) ワークシート。第4章掲載
- (24) ワークシート。第4章掲載
- (25) ワークシート。第4章掲載
- (26) ワークシート。第4章掲載
- (27) 話者に持ってきてもらうよう依頼する。
- (28) ワークシート。第4章掲載
- (29) ワークシート。第4章掲載
- (30) もしもこの時点で完成できていないような場合。
- (31) 「生徒への導入」として使用されるもの——キュープラー・ロス『子供と死について～子供たちの死に関する視覚的な解釈の叙述のために～』を参照せよ。
- (32) 一人一人に手紙を書かせてもよいし、全員の署名がなされている「大きな」手紙を送ってもよい。ここでのポイントは経験の共有が肯定的なものだったとイメージできる内容を手紙に記すことである。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

- (33) この講座の効果を分析するために筆者たちは親の評価用紙の返還を勧めている。期日までにそれを返してくれた学生にはアイスクリームをご馳走することになっている。

第4章 ワークシート

このワークシートは死と終末に関する授業を行っていくときに直接このテキストからコピーしやすいようになっている。我々が追求しているのは結局のところ「信用が必要とされるところで信用を得る」ことであり、だからこそ自分の名前が用紙に公表されることを許しているのである。

ワークシートは授業で使ってみるとよく整理されていることが分かるだろう。どの項目についてもその日の指導案には脚注がある。「準備・(事後)確認テスト」については講座の始めと終わりで使えるようにコピーが2部必要だったということを出してほしい。

この章の終わりには「死」をテーマにした様々なゲームが紹介されている。体育の授業で扱ってもいいし、単なる確認の意味で取り入れるのもいいだろう。真剣な討議ですり減らした神経を開放してやるのは楽しいものだ！

我々はときに親たちがコピーを1枚ないし2枚持っていくことを経験的に知っている。だから、どの用紙についても予備を何枚か持っている都合がよいわけである。それら毎年使われる(親への手紙と予定表を除く)から、保存用の用紙は傷をつけないようにしておきたい。

親への連絡

保護者各位

来週から死と終末についての講座を開講いたします。この講座を開講している機関はここ10年の間にその数を増やしてまいりました。死がライフサイクル全体に占める位置について子供たちがきちんとした意識を持てるようになります。悲嘆に暮れるような状況の中で自分自身の感情をきちん

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

と把握できるようになったり、他者の感情を慮ることができるようになります。そして深い悲しみが教えてくれるものの大切さを認識できるようになります。ここでは文化的にあるいは社会的に認められている方法で悲しみとどう関わっていったらいいか学びます。また葬儀や埋葬、そしてそれを取り巻く文化的な慣習をよく理解できるようにします。我々がこの講座を開講する目的はこうしたことにあります。死や埋葬についての宗教的慣習を家で説明してあげたり、授業での討論に気軽に加わることで子供たちを応援してあげてください。

テーマについてきちんと説明してから我々はフィルムを上映し、絵を描き、物語を味わい、適切だと思われる音楽について学び、そして時間のほとんどを費やしそれぞれの授業を通じてわき起こってくる感情について議論しようと思います。教材について予め通知いたしますし、昼間ないし午後後の時間を使っての討論において補助役の教員やあなた自身と出会う機会を設定いたします。もちろんどの授業についても同じです。我々は心から皆様方をお待ちしています（添付された予定表をごらんください）。葬儀場や共同墓地を訪問する際には是非おいでください。

下線のある部分ならびに承諾書に署名等を書き込んでいただくようお願いいたします。どの子供についても保護者各位との関係を大切にしていきたいと思っていますし、死に対する姿勢を学んでいく上において皆様方の援助が不可欠だと考えています。もっと良く話をしたいと思う点があれば、どうぞお気軽に私か補助役の教師に連絡してください。講座期間中に皆様方ないしお子さんに不都合が生じたら、そのときにもご連絡をお願いいたします。

担当教師名： _____ 補佐教師名： _____
電話番号： _____ 電話番号： _____
所 属： _____ 所 属： _____

講座予定表，受講承諾書，家族史のシート，講座の目的

〈死と終末〉講座予定表——19××年度

曜日，（日時）—保護者会

教師の名前一会合の場所

担当教員との顔合わせ，教材の確認，コースについての意見交換。

講座の準備行動：

1. 準備テスト。
2. 絵画。

曜日，（日時）—第1時限：ライフサイクルにおける死

1. 「死」とは何かについての話し合い。
 - A. 人間やペットにまつわる体験を共有していく。
2. フィルム—生と死。
 - A. 議論。

曜日，（日時）—第2時限：悲嘆の情緒的段階

1. こうした感情についてのリストを作る。
 - A. ～から：悲しい物語や音楽，夢そしてテレビ番組など。
 - B. 我々はだれとこうしたものを共有するのか。
 - C. どんな感情が適切といえるのか。
2. 援助体制。
 - A. そこにいて助けようとしているのは誰か。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

B. 「ひなぎく」という援助用紙を完成させる。

曜日、(日時) — 第3時限：死の究極性

1. 死の場面の記されたやさしい書物を採り上げそれについて話し合う。
2. 医療に従事する人間。
3. 信仰。
 - A. 迷信。
 - B. 儀式。
4. 「どうして家族にはさよならがあるのだろう」を家に持ち帰って完成させる。

曜日、(日時) — 第4時限：死とともに生きる

1. 「どうして家族にはさよならがあるのだろう」について話し合う。
2. フィルム—黒イチゴの味
 - A. 子供の終末期について議論する。
 - B. 親族関係。
3. 死の原因。
 - A 疾病。
 - B. 突発的事故。
 - C. 自殺。

曜日、(日時) — 第5時限：現行における保護⁽¹⁾

1. 現段階で一人の成人が家族の暮らしを保証しうる事柄について話し合う。
 - A. 保険証券。健康保険および生命保険。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

- B. 遺言。
 - C. 未成年者の後見人。
2. 話し手。
- A. 弁護士。
 - B. 保険代行業者。
3. 用紙を埋める。
- A. 遺言。
 - B. 死亡記事。
 - C. 墓碑。

曜日，（日時）—第6時限：儀式と習慣

1. フィルム—葬儀場と共同墓地。
- A. 異なる文化的慣習。
 - B. 話し合い：悲しい葬儀，楽しい葬儀，音楽に満ちた葬儀。
 - C. 歴史を物語る墓地の使用。
2. 話し手。
- A. 異文化に属する者。

曜日，（日時）—第7時限：葬儀場と共同墓地

1. 我々は午前8時45分に学校を出発する。
- A. 午前9時—（名前）葬儀場を訪問する。
 - B. 午前10時15分—（名前）墓地を訪問する。
 - a. 質問用紙に書き込む。
 - b. 拓本をとる。
 - c. 屋外での食事。⁽²⁾

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

曜日、(日時) 一第8時限：まとめ

1. 授業における最終的な質疑応答と話し合い。
2. 確認テスト（あるいは）学生による評価。
3. 最後に描く絵画。

曜日、(日時) 一親の評価

親に書き込まれた評価用紙が返還される。そうしてくれた学生はごほうびを受け取る。

講座〈死と終末〉受講承諾書

子供である_____が死と終末の授業を受講すること、並びにクラス単位で野外実習に参加することを承諾いたします。実習参加に際し、交通手段はスクールバスを予定しています。

授業や野外実習への出席、そして保護者会で使用される教材の下検分に際し、学校当局があたたかい態度で接してくださっていることを十分認識しております。野外実習に参加できるようなら、交通手段を自分で選び現地に足を運ぶことにいたします。

_____である私は野外実習に参加する予定であり、そのときには喜んで学生たちのお手伝いをいたします。

(親ないし保証人名) _____

(電話番号) _____

家族史のシート

死とそれにとまなう深い悲しみについてより有意義な授業を展開し理解

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

を深めていくため、この用紙へ所定の事項をご記入願います。それにまつわる子供たちの体験ならどんなことでも我々は知りたいと思いますし、あるいは今後こうした場面に出くわしたとすれば皆様の想像として彼らはどんな不安感を抱くだろうかということも聞いておきたいのです。この件に関してもっと詳しくお尋ねになりたい方は保護者会でもかまいませんし担当教師のどちらでもお気軽にご連絡ください。

1. 過去2年以内に子供の家族（親，兄弟）が亡くなった経験はありますか。____もしそうであれば子供との関係は。____その2年間前はどうか。____もしそうであれば子供との関係は。____
2. 過去2年以内に子供の親戚（叔父，叔母，祖父母など）や親しい友人が亡くなってしまったことがありますか。____もしそうであれば子供との関係は。____その2年間前はどうか。____もしそうであれば子供との関係は。____
3. 子供の可愛がっていたペットが亡くなってしまったことはありますか。____もしあるならそれは何歳のときでしたか。____子供はペットのお墓を作ってあげましたか。____
4. 現在，家族の中に死を覚悟しなければならないような人はいますか。____子供の親しい友人についてはどうですか。____子供はそんなつらい立場について話したりすることがありますか。____
5. 最終段階として死を引き起こすような病気（ひどいアレルギー，喘息，悪性の貧血など）を子供が抱えていますか。____自分自身でその事実気づいていますか。____
6. 子供は葬儀に参加したことがありますか。____何歳のときでしたか。____葬儀場に行ったことはありますか。あるとすればそれは何歳のときですか。____共同墓地に行ったことはありますか。あるとすればそれは何歳のときですか。____
7. 子供は死体を目にしたことがありますか。____ペットのものはど

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

うですか。_____人間についてはどうですか。_____

8. 必要以上に死を気にしたり怖がったりする様子が見受けられますか。
_____もしそうであればどんな行動（悪夢、ホラー映画やテレビ番組
におびえる、ひとりぼっちになることを不安がるなど）を示しますか。

この用紙に述べられたことは 守秘事項です。許可なく子供に見せる
ことのないようにしたいと思います。講座終了後に処分いたします。

（親ないし保証人名） _____

（子供の名前） _____

〈死と終末〉：講座の目的

1. 死の究極性を理解すること。
2. 死がライフサイクルの一部であることを受け入れるようになること。
3. 悲嘆の諸段階についてよく知ること。
4. 専門用語を覚えること。
5. 他の文化圏に属する人について学ぶこと。
6. 様々な死因について学ぶこと。
7. 追い詰められた状態における死以外の選択肢について学ぶこと。
8. 芸術、音楽そして文学に示された死について触れること。
9. 死における儀式の遂行について、そしてまた遺された者の危機状況を救う癒しの特徴について理解すること。
10. 死はいつでも納得できるようなものではないし（年齢などを考慮すれば）公平にやってくるものでもない。それでも人生は満足できるし幸せに送れる。—そうしたことを理解すること。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

準備・確認テストと発問のワークシート

（氏名） _____

（日付） _____

〈死と終末〉準備・確認テスト

1. 生きとしいけるもの全てに死が存在する。 正・誤
2. アメリカにおける市営公園はあたかも共同墓地のようなデザインになっている。⁽³⁾ 正・誤
3. 悲しいときなら子供は泣いてもかまわない。 正・誤
4. 悲しいときなら大人が泣いてもかまわない。 正・誤
5. 死にゆく人間がうめき声をあげたら、間違いなく病気が原因である。 正・誤
6. 死はいつも3つの要素が原因で生ずる。 正・誤
7. 誰かが死ねば、そのときいつも新生児が誕生するだろう。 正・誤
8. 迷信とは臨終にまつわる事実を意味する。 正・誤
9. 他の国における葬式はまったく趣を異にする。 正・誤
10. 死後人間の魂に生ずる変化に対する信仰は全ての文化圏の同一である。 正・誤
11. 葬式の執行者は頭髪をカットする。 正・誤
12. 死亡記事はその人との精神的距離がどれくらい離れてしまったかを示す。 正・誤
13. 我々の文化においてひつぎは地下納骨所内に置かれる。 正・誤
14. 有名な一族やある時代に流行した病気について教えてくれるから歴史家にとって共同墓地の存在は大きい。 正・誤
15. 墓地を記録する唯一の方法は墓石が伴っているものを探すことである。 正・誤
16. 拓本はかなり古い石を探す方法としてたやすくできるものだ。 正・誤

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

17. 共同墓地では無駄口をたたいてはいけないし悲しげにしていなければ
ならない。 正・誤
18. 遺体が茶毘に付されたら遺骨をひつぎにおさめてもよい。 正・誤
19. 記念公園には台石や記念碑がある。 正・誤
20. 碑文には死者の名とその日付のみ記すことが許されている。 正・誤

(氏名) _____

(日付) _____

〈死と終末〉の講座期間中に学びたいと思うこと

1. _____ 死への恐怖とどう関わっていくべきかを学びたい。
2. _____ 深い悲しみにくれる人物と行動をどう共にしていくべきかを学
びたい。
3. _____ 友人が死についてどう感じているかを学びたい。
4. _____ 死と終末への恐れを最小限度にしていきたい。
5. _____ 死についての議論を行うとき不快にならないようにしたい。
6. _____ 葬儀場へ行きたいと思うし、怖がらないでいたい。
7. _____ 死の問題について話にきちんと耳を傾けてくれ意思の疎通がは
かれるようなクラスメイトを得たい。
8. _____ 死と終末にまつわる私の感情について配慮してくれる教師がほ
しい。
9. _____ 私が死の問題で怯えたり、大切にしている人間が病気になるた
り傷ついたりしたときに話し相手となる人物を見つけたい。
10. _____ 人が死を恐れる理由について理解したい。
11. _____ 老いと病に対してもっと寛容になりたい。
12. _____ 私が学びたいと思っている他の事項 _____

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

〈死と終末〉キーワード・リスト

受容	終末	死体置場
怒り	ミイラにする	哀悼する
検視	墓碑	死亡記事
取り引き	(死者に対する) 賞賛	オベリスク (方尖塔)
死別	法廷遺言執行者	孤児
棺	女子法廷遺言執行者	ひつぎ
死骸	葬送	焼却炉
埋葬する	葬儀用の馬車	石棺
共同墓地	葬儀屋	陰気な
儀式	墓地	悲しみ
終結	墓掘り人	自殺
哀悼	墓石	迷信
死体	悲嘆	遺言者
儀式に参列する人	罪悪感を抱く	終末期の介護
火葬	霊柩車	骨つぼ
火葬場	法定相続人	地下納骨所
泣き叫ぶ	保険	検分
(埋葬用の) 地下室	土葬	(聖職者の) お見舞い
死	最後の儀式	声を上げて泣く
死亡証明書	台石	起き上がる
死去した	記念碑	未亡人
腐敗する	霊廟	男やもめ
否定	記念して作られたベンチ	遺言
抑うつ	記念公園	無常
死ぬ	記念となる儀式	
葬送歌	死すべきもの	

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

ワークシート

ワークシート

日付 _____

ひ な ぎ く

悲しみを越えるためのサポートシステム

組 番 氏名 _____

①

(氏名) _____

(日付) _____

以下にあげる文章を完成させよ

死はちょうど _____
_____ ようなものである。

死に関して良しとされることは _____
_____ である。

死に関して最も傷つくことは _____
_____ である。

死は _____
_____ ようなときに起こるだろう。

私の命がたった3週間しか残されていないとすれば、 _____
_____ したいと思う。

_____ ときに人が亡くなった（あるいは人と別れた）ので私は悲しみにくれた。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

_____が私の人生に転機をもたらした。
(人間の名前あるいはペットの名前) _____が私に_____
_____という感情を抱かせた。

②

(氏名) _____

(日付) _____

どうして家族に「さよなら」があるのだろう

1. 家族の誰かが亡くなったときに目にするようになる伝統行事や儀式、慣習といったものについて、親や（あるいは）祖父母と話し合う。
(それからこの用紙に書きこむ)

2. 家族がとり行う儀式は文化的（あるいは民族的）伝統に根ざしたものなのか、宗教的伝統によるものか。

3. 埋葬（あるいは）故人を記念する儀式が行われた後に家族で特別な「お祝い」や「お祭り」をするか。あるとすればそれはどんなときか。
(どんな日に行うのか。儀式の後どれくらい経ってから行うのか)

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

4. どれくらいの期間、家族は形式上喪に服していなければならないのか。
(ちなみにユダヤ教徒は9日間だし、ヒンズー教徒は11日間である)⁽⁴⁾
-
5. この時期の行動や服装について通常とは異なったものが要求されるだろうか。もしそうだとすればどのように。
-
6. 埋葬後に何か特別の記念儀式に参加させられるだろうか。そうだとすればどれくらい経ってから（30日、1年など）だろうか。その頻度はどれくらい（年に1度、生きている限りずっとなど）だろうか。できるだけ詳しく述べたいと思うのなら（この用紙の）裏を使って書くように。
-

③

ロールプレイ用の脚本

1. あなたにちょうど今ペットの死が伝えられました。そのことを話したのは誰ですか。——お母さん、友人、獣医さん、あるいはペットを死なせてしまった人物でしょうか。みなさんはどんな行動をとりますか。
2. 担任の先生がお亡くなりになったこと、新任として_____先生が皆さんを受け持つことをお話しに校長先生がやってきました。あなたやクラスメイトはどう感じますか。このようなとき誰に来てもらいたいと思いますか。そしてどんなことばをかけてもらいたいと思いますか。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

3. ずっとあなたのそばで暮らしていた祖父母が亡くなりました。そのことをあなたに誰が伝えるでしょうか。どんな風に話すのでしょうか。あなたはどんな振る舞いをするのでしょうか。親についてはどうですか。兄弟についてはどうですか。そしてそれは何故ですか。

4. めったに会うことのなかった祖父母が亡くなりました。そのことをあなたに誰が伝えるでしょうか。どんな風に話すのでしょうか。あなたはどんな振る舞いをするのでしょうか。親についてはどうですか。葬儀に参列しようと（あるいは）したいと思っていますか。その理由は。そう思わない理由は。

5. 親しい（最も仲のいい）友人が亡くなりました。そのことをあなたに誰が伝えるでしょうか。あなたはどんな振る舞いをするのでしょうか。故人と仲のよかった友人たちについてはどうですか。——教師や親についてはどうですか。

④

_____の遺言状⁽⁵⁾

私こと_____はここに遺言としてこの書状をしたためたことを宣言し、あわせてこれ以前の一切の取決めに関し、これを無効とすることといたします。

項目 I

私が所有し権利を有する以下の財産については死後一切を放棄し、以下に挙げる人物にそれぞれ寄与するものといたします。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

項目 Ⅱ

この遺言の執行者（女性）として _____ さんを指名いたします。

この件に関する証明として、私は19__年の__月__日に _____（市町村名）の役場にかかる文書を提出し、最後のページに私の名前をサインしました。私の意志はそこに表明されていますし、欄外にイニシャルを記すことによって上記事項の確認は終了済みであります。

遺言者 _____

前記の文書は _____ 氏本人によって我々の眼前で署名がなされました。そして本人より我々に対しこの文書を公表し遺言として宣言せよとの依頼がありました。我々は証人として彼の要求に基づき、彼と第三者との眼前で日付と名前を書き添えました。

(氏名) _____

(日付) _____

⑤

(氏名) _____

(日付) _____

自分で死亡記事を書く⁽⁶⁾

今日 _____ 氏が亡くなった。 _____ 歳であった。氏は _____

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

_____（場所）生まれの _____ 人で， _____

_____（あなたについて思い出さだろうということは何か。どんなことを思い出してもらいたいか）として思い出す人も多い。

大切な人間に先立たれた _____

_____（家族であなたより長生きしそうなのは誰か）
葬儀および告別式の場所と日時は以下の通り。 _____

葬儀の後、遺族にはこんな状況が予想される。 _____

（精神的回復について。何か起きそうなこと。そんなことでも）

⑥

（氏名） _____

（日付） _____

墓碑⁽⁷⁾

埋葬の「方法」を自分で考えて述べよ。——墓標を立てるとか、遺骨を納める骨つばについてなど、「永遠の眠りにつく場」の碑文として相応しいものは何かを書いていく。

7

(氏名) _____

(日付) _____

共同墓地での作業

1. 一風変わった、あるいは見るからに相応しい墓碑についてメモする。
2. 最も長生きした人間の名前、享年、生年月日、そして亡くなったときの日時をメモする。
3. 最も早く亡くなった人間の名前、享年、生年月日、そして亡くなったときの日時をメモする。
4. 最も古いお墓に記されている日時はどうなっているか。
5. 最も新しいお墓に記されている日時はどうなっているか。
6. 一風変わった墓碑について記述し絵を描く。
7. 墓石に刻まれたデザインないし文章について一つ（できればそれ以上）拓本をとってみる。（教師から拓本に用いる紙をもらうように）

8

共同墓地での課題カード

調査すべき家族の名前を選ぶように。自分の家族についてでもよいし、ある時期にその地域で有名になった家族でもよい。家族のメンバーが存命しているかどうかは大した問題ではない。あなたの得た情報は共同墓地での記録として集積すべきものとなる。

1. 調査対象として選んだ家族名は。
2. 墓地にはその家族のメンバーが何人くらい葬られているだろうか。
3. この地で初めての家族の人間が葬られたのはいつか。
4. izzごろその家族はこの地域にやってきたようであるか。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

5. 各世代の平均寿命はどれくらいであるか。
6. 全ての（あるいは多くの）メンバーの死因について特に顕著なものが挙げられるだろうか。（流行病，突発的イベントなど）
7. その家族は子供を多く亡くしているだろうか。そうであれば平均寿命はどれくらいか。
8. その家族は軍隊あるいは社会的組織に参加しているように思えるか。もしそうであればその中の一つを挙げよ。
9. 家族のメンバーが主に従事しているように感ずる職業とは何か。
10. この家族についてこれ以外にあなたが述べておきたいと思うことは何か。

（学校名） _____

（日付） _____

9

生徒の評価

今後に生かすためこの講座について思ったことを教えてほしい。できるだけ正直に答えてもらいたいと思う。必要と思わなければ名前を書く必要はない。

1. 講座は楽しかった。 _____とても良い _____まあまあ _____悪い
2. 以下に挙げる話し手に好感を持った。
外国人の話し手。 _____とても良い _____まあまあ _____悪い
医療に従事する人間。 _____とても良い _____まあまあ _____悪い
クラス担当の教師。 _____とても良い _____まあまあ _____悪い
補助役の教師。 _____とても良い _____まあまあ _____悪い
3. フィルムはよかった。 _____とても良い _____まあまあ _____悪い
4. 死についての感情や体験について話し合う機会を持ててよかった。
_____とても良い _____まあまあ _____悪い

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

5. 教室で他の人たちが死についてどう感じているのか聞いたことが良かった。 __とても良い__まあまあ__悪い
6. 死についての様々な感情（悲しみ、怒り、否定など）を抱くことが自然であるとわかってよかった。 __とても良い__まあまあ__悪い
7. 葬儀場に行けたことはよかった。 __とても良い__まあまあ__悪い
8. 葬儀場で最も好感を持ったことは _____
9. 葬儀場で最も好ましくなかったことは _____
10. 共同墓地に行けたことはよかった。__とても良い__まあまあ__悪い
11. 共同墓地で最も好感を持ったことは _____
12. 共同墓地で最も好ましくなかったことは _____
13. 講座を受講して最もよかったことは _____
14. 講座を受講して最も好ましくなかったことは _____
15. 他に言いたいことは _____

礼状と親の評価

保護者各位

死と終末に関する講座期間中は、一方ならぬご理解やご協力をいただきまして教員一同心より感謝申し上げます。皆様方が情緒面で子供に配慮してくださり、また（こうした）やっかいではあるが現存する問題に子供が関わることへご協力してくださったことは、我々の学習が一定の成果を上げる大きな原動力となりました。お子さんたちとともに深まっていたオープンなコミュニケーションを今後も続けてほしいと願っています。

地域の葬儀屋さんや共同墓地の管理人さんのご協力なしに我々は何一つなしえることができなかったように思います。ビデオや書物、パンフレットを教室に持ってきていただいたことをみても、彼らの我々への協力には

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

特筆すべきものがあります。また地域内にも我々に対する協力を惜しまなかった人の存在があるわけです。

最後のお願ひがあります。同封した「親の評価」用紙に忌憚のないご意見を書き込んでいただき、指定された期日までにお返しくさるようお願ひいたします。どんな形であれ、この講座をよりよいものにしていくために数多くのコメントを期待しています。お望みでなければ署名していただく必要はありません。お約束したとおり、指定された期日（その日だけです）に用紙を提出してくれた生徒には我々から素敵な「ごほうび」をプレゼントいたします。

重ねて皆様方のご理解とご協力に感謝いたします。ほんとうにありがとうございました。

担当教師名： _____ 補佐教師名： _____

親の評価

1. 講座＜死と終末＞について子供さんの反応を評価してください。
__とても肯定的__ 肯定的__ どちらでもない__ やや否定的__ とても肯定的
2. 講座について子供さんはあなたや（あるいは）家族と話し合いましたか。
いつもより多く話した__ 普段通り__ いつもより少なかった
3. 子供さん以外の家族のうち、この講座に何らかの圧迫感を感じた人はいましたか。
__はい__ いいえ
4. 講座終了後に始まった教師を伴う補足授業をあなたや家族は受けていますか。
__はい__ いいえ
5. 配偶者やあなたは講座開始の時点で行われた保護者会に出席しましたか。
__はい__ いいえ

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

6. 配偶者やあなたは講座期間中に授業や野外実習に参加しましたか。 _____ はい _____ いいえ
7. この講座は子供さんが成人したとき、かかる問題の解決に貢献してくれるだろうと感じていますか。 _____ はい _____ いいえ
8. この講座についてあなたはどのように感じていますか。
_____ 視野を広げるべきだ _____ このままでよい _____ 焦点を絞るべきだ
9. あなたが思うに子供に最も意味があったと思う講座の内容はどんなものですか。

10. 死と終末を紹介していくにあたって5つの学年を設定することについて適当であると感じますか。 _____
11. もっと突っ込んだ意見がありますか。 _____

講座へのご協力に感謝いたします。

担当教師名： _____ 補佐教師名： _____

ゲーム

我々が誰でも知っているゲームには死をテーマとしたものが数多い。たとえば、ある場所では伝統的に天災の犠牲者が死に逝く有り様にもとづいたと考えられている「輪になってバラを困む」というゲームのようなものがそうである。今日、書籍や盤上あるいはコンピュータを使ったゲームにおいて敗者が「死ぬ」⁽⁸⁾ものも多い。我々はこうした観点から子供の行う伝統的なゲームについて考えていくことにする。

運動を伴うもの：

ロンドン橋あるいはアフリカでアフリカ式のわなとして知られるもの。二人の子供が相手と手を組んだまま空へ向かって腕を持ち上げる。他の子供は全員でこんな歌を歌いながら列を組んでその「わな」の下を通り抜けていく。

ライオンとヒョウが、ライオンとヒョウが、
闇夜に狩りをする。

ライオンとヒョウが、ライオンとヒョウが……
獲物を捕まえた！

「獲物」や「わな」ということばを発すると二人の子供は腕を下ろし、「獲物」を「捕まえる」。「獲物」は「食べられる」。(捕えられた人間はゲームが終わるまで再び参加できないが、ライオンまたはヒョウになる)

雌鳥と暴れん坊のネコ—これもアフリカのもの。このゲームには「雌鳥」と「暴れん坊のネコ」という二人の主役がいる。雌鳥はひな鳥導きながら尾を立てて庭を歩いている。ネコはその様子をじっとうかがっている。雌鳥はネコを目にすると、恐怖のあまり体が「硬直」してしまったひな鳥に叱咤激励し、あわてて野原に駆け込もうとする。野原に

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

駆け込む前にネコに捕らえられたら、その鳥は「死んだ」（または「食べられた」）ことになる。このゲームは最後のひな鳥が捕らえられるまで続いてゆく。

さそりの針—インドのもので、とりわけ元気な子供が一人いるならほんとうに面白いゲームになる。「さそり」は四つん這いになって、あたかもさそりのしっぽのように空中へ1つの足を上げておく。他の子供は持ち上げた足以外の体に触って彼を「からかう」ようにする。もし彼の足が誰かに触った場合には、触られた人間は「死んだ」のでありゲームから除外される。最後に死んだ人間が新しいさそりとなるか、最初にさそり役を努めていた人物と代わることになる。

イギリス生まれのウィリアム・テルはもともと弓と矢を使ったゲームである。このゲームを説明するとまず頭の上にリングを載せた等身大の絵が紙に描かれる。それはウィリアムの「息子」を意味する。子供は絵から15～30ヤード離れたところに立ち、弓矢で狙いを定める。息子を射てしまった人間は彼を「殺した」ものとしてゲームを続ける権利を失う。リングにも息子にも矢をあてなかった人間は次の順番を待つことになる。勝者は最初にリングを射ぬいた人間である。

野ウサギと猟犬もまたイギリスのゲームである。このゲームでは野ウサギ—2人以上いてはいけない—に紙の切れ端（ポップコーンなど）の入ったバッグが手渡される。彼らは最低100フィートごとに目印としてそれを落としていか

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

なければならない。隠れる場所を見つけるため彼らには前もって5～10分の時間が与えられる。残りの子供は「猟犬」となって定められた猶予の時間が適ぎたときから彼らを追いかける。もし猟犬のうちの誰かが野ウサギを見つけ出したときには、他の仲間に教えるため「大声で叫ぶ」。野ウサギが「巣」である出発点に戻らないうちに猟犬は全員で取り囲もうとする。最初に野ウサギに触れた人間が次のゲームにおいては役割を交替し野ウサギとなる。

毒の輪はアメリカに昔から伝わるものである。このゲームでは周囲4フィートほどの中心となる輪が土で描かれ、その円の真ん中には柔らかいボールが置かれる。描かれた輪にそって子供たちは互いに手をつなぎ、その手を押ししたり引いたりして仲間を「毒の輪」に入れようとする。始めにその輪に押し込まれた人間が真ん中にあるボールを拾うと残りの子供は雲の子を散らすように逃げ回る。そして彼はその中の一人目がけてボールを投げる。ぶつけられた子供が今度は他の子供に投げかえしてから輪の中に駆け込む。ゲームは全員にボールがあたり、また全員が輪の中に入るまで続けられる。

カーボウイとインディアン並びに彫像の存在を抜きにしてこうしたゲームを語ることはできないだろう。そう、彫像にだってその背景には鬼ごっこなどと同じく「死」への伝統的な解釈が存在するのだ。捕まったり、動かないようにされたり、撃たれたりすることが遊びからの除外を意味するようなゲームには必ず基本的な前提として死の観念が散見されるのである。

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

メモ：

- (1) オプションとなるレッスン。時間がないようなら省いても構わない。
- (2) オプションである。
- (3) アメリカにおけるこうした地方自治体デザインの最初の大がかりな共同墓地は、医師で詩人でもありまた植物学者だったジェイコブ・ビジェロウ博士によって確立された。1825年、マサチューセッツ州ケンブリッジにあるオーバーン山に計画された博士の案は、やがてアメリカにおける「庭園式」の共同墓地の一つの定型となり、結果として市営公園のモデルとなっていった。
- (4) 葬儀はあらゆる死体の処理に関わっている一方、埋葬にも大きな役割を果たしている。チベット民族の中には、魂の抜けた体には何の価値もないと信ずるが故にただ山中に遺体を捨てるだけのものもある。体系のきちんと整っている宗教を世界的に考えてみると、数多くの宗教では葬儀の日を何日も拡大してとらえており、その中で死者の魂を保護し、あるいは魂の再生を確かなものとする儀式を行っていくのである。
- (5) 深刻に受け止めてはならない。生徒たちが人生において成し遂げたいと思っている夢を応援すべきだし、人生で直面しなければならない不遇や罰といったものをどのように乗り越えたいかについてアドバイスすべきである。警告する！次にあげる2枚の用紙やこの用紙を埋めることについて深刻になっている生徒がいるようであれば、その子供を校内カウンセラーに診てもらうようにすべきである。何かの兆候かもしれないし、深刻な情緒的問題そのものを意味するかもしれないからである。
- (6) 繰り返すが深刻に受け止めてはならない。お互いのつながり、職業として自己実現したいこと。そんなことについての夢を応援してやるように。
- (7) くどいようだがもう一度確認する。深刻に受け止めてはならない。こ

子供たちのためのデス・エデュケーション（Ⅱ）

の授業は彼らにとって、芸術的なデザインについて深く学ぶ驚くべき体験であり、言葉遊びや詩的表現そして彼らが待ち望む生活について簡潔に述べるための他の事物を使った印象に残る授業となるであろう。

- (8) 「土牢と竜」「(謎の)手がかり」「戦争」「危険」「Robotron」など。